

検討を通じて論じた労作である。当時の北魏が遊牧民の国家からの脱皮を図りながら、多数の遊牧諸族を内部に抱え、また経済的基盤の弱さから、遊牧国家の特色である略奪経済の変型である各地からの朝貢により支えられ、洛陽へ遷都するまで実現できなかったことがわかる。ところで、著者のいう歴史地理学研究はわれわれの考えるそれとは、はじめにも述べたようにならかなり異なる。このことはさきに掲げた「歴史地理研究」と銘打った著作に共通していることで、いずれも歴史地名・行政領域・自然環境・交通路の復原考証に主眼を置いた沿革地理的研究をもって歴史地理研究としている。論文集である日比野氏の著書以外は中国那境地方を対象地域とした論考である。その地域の歴史がほとんど明らかでない北アジア・内陸アジア・中央アジアでは、こうした地道な沿革地理的研究の積み重ねが歴史の流れを再構成するため必要不可欠な基礎作業となるが、そこに個々の都市や集落の形態、耕地や道路網の形成など景観論的研究がないことにわれわれの違和感や不満の原因がある。しかし、それを要求するのは酷であるし、われわれの方が反省すべき点でもある。近年、中国では雑誌『歴史地理』が刊行され、史念海『河山集』（第1集、1963年、第2集、1981年）、侯仁之『歴史地理学的理論与实践』（1979年）、同『歩芳集』（1981年）、馬正林『豊鎬—長安—西安』（1978年）、鄭徳坤『中国歴史地理論文集』（1981年）、黄盛璋『歴史地理論集』（1982年）、同『歴史地理与考古論叢』（1982年）、『中国歴史地理論叢』（1981年）、『江蘇城市歴史地理』（1982年）など著作集・論文集が続々と出版されている。なお、沿革地理的研究が多いのは否めないが、景観論的視点をとり入れたり、地域構造論まで発展させた研究も少なくない。中国の歴史地理研究を東洋史学者だけに任せず、われわれ地理研究者が積極的に取り組むことの必要性を痛感する。

（林 和生）

中島健一・ 灌漑農法と社会=政治体制：校倉書房、1983年、A 5判229頁

著者の中島健一教授は、本書を出版する前に、すでに古代オリエント文明に関する歴史地理学的労作『古オリエント文明の発展と衰退』ならびに『河川文明の生態史観』の2冊を出している。第3冊めの『灌漑農法と社会=政治体制』は、従来の成果を集大成したものといえよう。

本書は前編と後編からなっているが、前編は、降雨帯の移動によっておこされた、後氷期の近中東地方における気候変動にともなう歴史の構造変化の歴史地理学的研究である。その内容は、後氷期のサハラ周辺地方やナイル川流域における食用植物の栽培化、家畜の飼養の起源の問題と、エジプトのファラオー（帝王）体制への発展や貯留式の灌排水農法との社会対応、およびその発展過程について、現地調査をふまえた上で記述したものである。後編は、前編の構想を世界史的に裏づけ、歴史地理学の面から、著者の生態史観にのっとり、国際的研究動向を整理している。その要点は、本書を通してK・A・フォン・ウィットフォーゲルの「治水文明論」についての仮説の検証・修正にもあてられている。

つぎに本書に対する著者の態度は、従来のわが国の歴史学界で、人間生存の歴史を解明する際、自然史的諸条件に対する関心がほとんどなく、「地理的決定論」と決めつけて、いわば、定量的な史観であったことに着目し、自然史的諸条件とのかかわり合いの諸契機を、定量的にその比重を考え、社会諸科学と自然科学との統合の上に立って、人間生態学に統一を企てようとしている。

そこで、天水農耕から灌漑農法への発展については、まず、新石器への移行をおこなったところは、いずれもオリエント中緯度地帯などであったことに注目している。ここでは丘陵斜面、谷口、オアシス周辺であったが、人々は河川の氾濫原が著しく肥沃であることに気づき、そこに生活の本拠を移すようになった。著者は、紀元前4,000年ごろ、つまり「亜降雨期」の末、気候の乾燥化にともなって、その沖積地が、天水農業地に比して4～6倍以上もの収穫があったことを立証し、そこでこれに対応すべき社会—政治体制と新しい灌漑システムが問題となったと考えている。

この点について、ウィットフォーゲルの仮説をみると、乾燥・半乾燥地域においては、大河流域の灌漑用水の利用について、農民は行政的に運営される巨大な作業組織をつくり出さねばならず、また、季節的氾濫の制御の治水事業も必要であった。彼はこのような治水灌漑農法を治水農業 Hydraulic Agriculture といいつて、天水農業や小規模な水利農業と区別している。この社会では、それを構成するものは第一に治水政府、第二に単一の中心をもつ社会、またそれにより営まれる治水農業であるとした。そしてこ

の三つが完全に遂行されるものが、つまり「治水文明論」の仮説として、東洋的専制 Oriental Despotism であるとした。

しかし、この仮説について著者は、まず実証的な意味合いでの検証(たとえば過大な解釈)、また地域性を無視していないか、等々の点で検討すべきであると考えている。つまり灌漑農法でも、水源は大小の河川の条件、溜池、オアシス、雪どけ水、地下水など地域によって異なり、それによる技術、農業方法、生産力なども異なり、政治、社会も異なってくるので科学的精度が問題であろうし、また畑耕農業では、灌漑・排水との適正な脱塩が重要であるが、ウィットフォージェルについてはその収支の具体例や脱塩の研究がほとんどないことに言及している。

さて、こうしたことをふまえて前編についてみると、古代エジプトの気候変動にともなう歴史の構造変化は、まず、後氷期の気候変動が、動植物の分布と、それにともなう採取、狩猟、家畜の飼育などの農・牧民に、生存・移住上の影響を及ぼしたこと、さらに北アフリカでの亜降雨期への移行にともなうて、冬季の降雨に恵まれたため、丘陵斜面、ワディの谷口地帯、オアシス周辺などで新石器革命をむかえたことがあげられる。それは、現在サハラ南・東部の周辺、ヌービア、上エジプト丘陵地の岩刻画などからみるように、サハラ南部、東部周辺からヌービア、上エジプトに拡大していったと思われる。この「亜降雨期」は紀元前4,000年中頃から変動し、乾燥化がはじまると、これらサハラやその周辺、ヌービア、上エジプトから遊牧民らもサハラ周辺から東部・西部へ移動している。

「亜降雨期」が終ると、ナイル川の流量は減少した。と同時にサバンナの荒廃、野生動物の減少、また著しい人口増加によって食糧危機がおとずれた。そこで上エジプトのエジプト人らは、流量の減少によって干上がった氾濫原へ進出し、無作為の天水、あるいは旱地農法から灌漑農法への道をとった。(紀元前3,000年ごろ)また同時に家畜飼育もおこなうようになった。

このように「亜降雨期」への移行は、「新石器時代」—著者によれば「新石器革命」といっている—をもたらし、つまり原始農耕、野生動物の馴化の端緒であった。そして「亜降雨期」の終わりには、乾燥気候へ移るにつれて、ナイル河谷では第二の農業革命、それは灌漑排水農法と家畜の飼育がおこなわれ、

それが古代エジプトの生産の基礎となったのである。

このとき、つまり「亜降雨期」の終りにともなうて、オアシス地方やワディの谷口地帯などから進んで、ナイル川の氾濫原へやってきたが、そこでかれらは、この川の季節的なメカニズム、すなわち、アビシニア高原への季節風による増水とさらに減水に着目して、貯留式の灌漑排水農法を選び、発展・習熟していった。

しかしながら、増水期にナイル川の流量の90%をしめる、青ナイルやアトバラ川の水源地方の夏季モンスーンの降雨量が、必ずしも一定しないため、年によって流量は異なり、河谷の氾濫の水位はしばしば変動した。この氾濫水位の変動に対する、技術的な対応は、きわめて困難な経験を重ねたと思われる。そのために、もっとも適切な社会—政治形態を決定しなければならなかった。こうしたところに古代オリエン特河川文明が成立したと考えられる。強大な専制支配による、灌漑排水システムは整備され、その農業方法による生産は高度に上昇した。そしてナイル河谷の農民は、著者の言によれば「両刃の剣」としての専制的なファラオー(帝王)体制に怯えながらも、永い単一の支配体制、すなわちきわめて集権的な古王国(ピラミッド時代)が永続していったのである。

ナイル川の定期的な氾濫に、その変動への適切な社会—政治的な対応、それによる農業生産力の安定化をはかることは、ファラオーや河谷の農民たちにとっては、基本的な死活にかかわる問題であった。したがってナイル川の氾濫が定期的な時代—それは気候に左右されるが—には、古代的な専制政治も安定して、灌漑排水農法もよくおこなわれ、農業生産力も発展した。しかし、氾濫も不定期、あるいは低水位が続くようになると、早魃・凶作・飢饉などを招き、それは農業社会を不安なものとし、民衆の不安、その社会あるいは政治体制も、しばしば混乱と無秩序におち入った。つまり気候変動によるナイル氾濫の乱れは、エジプトの社会・政治に負の相乗作用をおよぼして、社会・経済・政治的な衰退を招いたのである。

また後編については、ウィットフォージェルの「治水文明論」をめぐって、最近の国際的研究をふまえてのメソポタミア、エジプト、セイロン、南北アメリカ、メキシコ、ペルー、それに中島教授のかつてのフィールドの一つであったタイ国について歴史地

理的に詳述している。こうした各地域でみられる論旨は一貫しており、これからの研究者にとって良き指針を与えてくれるであろう。

評者がかいまみ中島教授の最近の著作の概要は以上のものであると思われるが、評者なりに整理してみると、歴史地理的立場でウィットフォークルの欠点ともいべき実証性、また地域性の問題を完全

に解決、少なくとも解決の方向を与えていると思われる。と同時に、歴史学などから地理学に対してなされた批判を、定量分析の欠如という点で、逆にほかの学問に対して鋭い批判を向けられたことは、地理学全体のためにとっても大きな意味をもつものといえよう。
(菊池一雅)